

害)、Richard Beck教授(造林第一部、Franz Neger 教授(植物病理学)、Wilhelm Borgmann 教授(木材測定学、狩猟及び漁業学)、Reinhard Hegershoff 教授(測量学、測量実習、設計図)、Paul Schmulh 講師(農学)

1913年夏学期：Friedrich Jentsch 教授(植民地林業) Arno GroB, 教授(森林利用)、R. Beck 教授(造林第二部)、W. Borgmann 教授(森林価値計算、木材測量学及び森林価値計算実習)、R.Hegershoff教授(林道建設)

1913年から14年至る冬学期：Heinrich Martin 教授(山林整備法/演習)、Heinrich Vater 教授(立地論/自然科学の部、鉱物学及び岩石学、土壤学演習)、F. Neger 教授(一般植物学/解剖学と生理学、植物学実習) Karl Escherich 教授(脊椎動物学、森林昆虫学第一部)、

筆者の手元には1912年から13年に至る冬学期の同大学の職員録(Personal-Verzeichnis)があるが、それを見ると、直繩が師事した上記の教授たちは当時のほぼ総ての正教授であって、私講師は四人いたがその内 P. Schmulh の講義を聴いたことが分かる。

だが、直繩はこれらの科目は履修しただけで試験は受けなかったようであり、具体的な成績を記録した資料は残っていない。

鍋島直紹(なべしま・なおつぐ)の自伝によると、父・直繩は留学時代ターラント市の森林管理官宅に下宿していて、度々ドレスデンの街へ行き、またザクセン地方を旅行したという。

修了証書(Abgangs-Bescheinigung)は1914年3月13日付で発行されており、「日本の東京から来た華族の鍋島直繩は1912年10月より1914年3月まで当地の林科大学に学生として在学し、この間裏面に記載された講義と演習を申し込んだことをここに証明する。彼の品行について何ら問題にすべき点はなかった」ということが書かれている。そして最後に林科大学学長 Jentsch の署名がある。

ターラントを去った後、直繩は今度はミュンヘン大学の林学科において研究し、次いで欧米諸国を視察し帰国した。大正4年に子爵を授けられた。帰国後は佐賀百六銀行頭取となり、同14年貴族院議員に選ばれた。昭和4年司法大臣秘書官に任じ、同6年第二次若槻内閣成立とともに海軍大臣に就任。1939年(昭和14)4月29日、東京都渋谷区代々木上原の自宅で他界した。享年49。長男の鍋島直紹(明治45生)は戦後、佐賀県知事を2期勤めたほか、柿右衛門文様など焼き物の研究者としても知られている。また日本と旧東独との親善・友好のために尽力した。

『独逸語新階梯』 著者 佐久間政一・大塚治雲

大正7年(1918)に南山堂書店より刊行された佐久間政一・大塚治雲^{まさいち}・大塚治雲^{じゆうん}共著の『独逸語新階梯』(全94頁)は、当時のドイツ語の自習用・教科用図書として特に優れたものではなく、ごく普通の入門書である。それでも現在のものと比べると、習字を重視し、発音について詳しく説明している点など時代を感じさせる。

ところで此処で述べたいのは上記の本のことでなく、二人の著者についてである。共に出版当時五高のドイツ語教授であった。佐久間政一は知る人ぞ知るブックメーカーで、ドイツ語

関係の対訳書や註釈書など種々出している。一方、大塚は早く亡くなったので、共著であるがこの『独逸語新階梯』が殆ど唯一の著書で、遺著となった。

佐久間政一は履歴書（五高記念館蔵）によると、明治18年（1885）1月4日千葉縣市原郡姉崎町に生まれた。千葉県立中学を卒業後、明治37年9月に第一高等学校大学予科に入学。同40年7月同校卒業後、直ちに東京帝国大学文科大学独文科に進み、カール・フローレンツの薫陶を受けた。同級には野村行一や、後年我が国新聞学の草分けとなった小野秀雄がいた。明治43年7月大学卒業後、東北帝国大学農科大学の独語囑託講師となり、翌年には同大学予科教授に任命された（高等官7等）。次いで大正3年（1914）に至り熊本第五高等学校教授に転任し、独語を担当した。『龍南回顧』所収の教え子たちの証言によると、彼の授業振りは厳しく、生徒を罵倒することは日常茶飯事であったようだ。五高時代の同僚で国語を担当していた高木市之助の『国文学五十年』（岩波新書）には佐久間が登場する。高木は彼のことを「酒好きで気性のあらい、そしてよくできる人でした」と書いている。ある日佐久間が熊本医専のU教授（魚住衛のことであろう）宅で座敷の縁側から寮雨（放尿）を降らして、Uが迷惑そうな顔をしたことがあったという。

佐久間の五高在職期間は足かけ5年であったが、『龍南会雑誌』に毎月のように独文学や美術に関する論文を発表するなど筆力旺盛であった。大正7年12月28日には仙台の第二高等学校教授となって熊本を去った。二高時代のことは『天は東北山高く』（旧制高等学校物語〈二高篇〉）には次のように紹介されている。（同書82頁）

「意地っ張り家で気取家だったという陸上競技部初代部長の佐久間政一教授（故人）は大正七年から昭和十七年まで在任。自著のドイツ語文法教科書を、どもりながらも鋭く教えた。酒が強く、飲み過ぎて宿酔のせい、休講が多かった。ドイツ語関係の訳本、注釈本、教科書、参考書の著作数では当時横綱格だったといわれる。」

この間佐久間は、大正14年1月から文部省留学生として1年半ドイツ、スイス、米くに留学した。同じ頃高木市之助も文学研究法の研究のため欧州に留学中であり、ベルリンでは彼から要領よくビール飲みや芝居見物など親切に案内されたという。亡くなったのは1949年（昭和24）8月24日である。

大塚治雲は履歴書（五高記念館蔵）によると、明治18年8月25日福岡県糸島郡櫻井村に生まれた。最初、同県築紫郡私立福岡仏教中学に4年間学んだ。次いで明治38年8月熊本の五高に入学。同校を卒業後、明治41年9月創設間もない京都帝国大学文科大学独文科に入学、藤代禎輔の指導を受けた。同44年7月卒業後、大学院に入学。同年11月には、京大文学会の機関誌『芸文』がクライスト死後百年を記念して『詩人クライスト記念号』を特集したが、大塚はこれに論文「愛国詩人クライスト」を寄稿した。

「クライストの生涯は実に困頓悲惨なる歴史であった。自己の活路と幸福とを求めむため、あるいは当時全欧の平和を攪乱した一代の英傑ナポレオン皇帝の侵略主義に対して祖国の自



由と独立とを濟はむがため諸国の間を流浪し文筆の上で随分健闘する所あったに關らず遂に彼は失意の境に終結した。」で始まる、クライスト34才の生涯中愛国的生活の概要を述べたものであった。これを書いた翌年大塚は母校五高の独語講師となり、大正4年3月に教授に任命された。五高時代は独語の教授以外に「第五高等学校仏教青年会」のためにも貢献した。

だが、大塚は大正7年12月5日に急逝した。死因は高木の『国文学五十年』によるとチブスであった。同じ頃数学の立山林平も亡くなっており、五高は同時に二人の教授を失った。校友会雑誌『龍南会雑誌』第168号（大正7年12月）に「師の訃」と題する弔辞が掲載された。大塚の葬儀は12月6日、五高にほど近い熊本市坪井の浄行寺で執り行われた。

「フィルターゲ。これ嘗つて大塚先生の生等に教へられし独文小説なりき。何ぞその御声の玲瓏として我が心に響き来るの尽きざる、師の柔和なる御容今に心を離れず。あゝ十二月六日、雨悲し香煙縷々として絶えざる浄行寺内、読経の声に涙袖を絞る者場に満つ。午後七時十分上熊本駅に謹んで先生の遺骨を送り奉る。悲しき汽笛。悲しき汽車の北に消えゆく影。あゝ、凄寥なるかな龍南。我れ龍南に來りて味ふ悲痛、今益々深み來にけりな。慈雨激しく降る。…」

『龍南会雑誌』第168号（大正7年12月）には高木市之助が「大塚君とむらひの日に」と題して短歌8首を寄稿している。3首を引く。「そのいのち『死ぬる死ぬる』とさげびたるたゝかひのあとのけふのしづけさ」「癒に果てばざりしや語やらうとつぶやきていく日もあらぬに、なにのざりしや語」「なにうらむとは無けれども人の死のいきどほろしくたへられぬかも」。

ドイツ文学翻訳家 中島 清

大正から昭和にかけての独文学者や独文学翻訳家の多くは東大をはじめとする官学の大学の独文科出身者で占められていた。しかも彼等の殆どは旧制高校などの教師であった。だが、私学等でドイツ語を学び、長く民間あって、優れた業績を残した人も僅かながらいた。そうした一人に佐賀県生まれの中島清がいる。

中島清は履歴書（文部科学省蔵）によると、1883年（明治16）10月6日、佐賀市多布施町216番地（当時・佐賀県佐賀郡神野村字多布施）に生まれた。なお、この履歴書は中島が晩年、昭和25年に北大講師に採用された際に中島本人によって作成され、それ以後の事項は北大事務職員によって記述されたと推定されるものである。さて中島は履歴書によると、佐賀尋常中学校に学んだが、明治29年3月同校を中退し、同32年9月、熊本陸軍地方幼年学校に第3期生として入学した。彼はここで初めてドイツ語を学んだと推定される。だがここも2年後には退学した。従って『熊本陸軍地方幼年学校一覽』（大正2年）の巻末の卒業生名簿には彼の名はない。その後、明治36年5月今度は東京の早稲田専門学校文学教育科に校外生として入学、2年後通信試験によりそこを卒業した。そして明治42年4月、本格的にドイツ語を学ぶために神田にあった私立の独逸語専修学校に入学した。同校は独逸学協会学校の附属学校で、ここに学んで名を成した人は多い。詩人で独逸文学の訳書もある生田春月がそうであり、魯迅もここでドイツ語を修めた。さて中島清はそこで2年間学び明治44年3月に卒業。更にドイツ語に磨きを